

「社会批評としての統計学」の伝統を継承すること

山 田 満

1. はじめに：社会制度としての「科学」へ

経済統計学会の前身である経済統計研究会は、「ドイツ社会統計学」の伝統を継承する研究者・統計実務家の研究会組織として1953年に創設された。そして、1955年4月には、機関誌『統計学』が創刊され、確固とした物質的基盤の上に、その歩みが開始された。以来、40年が経過し、その間、「標準的教科書」と呼べるテキストも何種類か作成され、高等教育機関を通じての「社会統計学」の普及と後継研究者・統計家の養成制度が確立された。そして、1985年には、研究会は日本学術会議に所属する学会へと発展し、経済統計学会が誕生した。また、1992年には、機関誌の改革が行われ、投稿論文の掲載の採否を編集委員・編集会議が決定する方式が改められ、レフェリー制度が導入され、学会誌がとるべき形式的要件の整備が進められた。経済統計学会は、社会形成に構成的に関与する歴史的・社会的装置として自己を制度的に確立したのである。

しかし、科学として社会制度的に確立されるのに並行して、会員を「集団」として結びつけていた共通の信念・規範・課題が揺らぎ始めているのではないかという意識が会員のなかに浸透している。これが、「新しい理論的枠組み」への変換の徴候となる「アノーマリー」な事態を意味しているのかどうかは不明である。しかし、確実なことは、科学として社会的に制度化していくことを用心深く進めていく一方で、「社会統計学」を取り巻く世界史の歴史的転換期の状況を念頭に置きながら、「社会科学的統計学」を社会的・制度的に確立してきた「伝統」とは何であったのかを再確認する作業が、歴史的転換期の社会統計学にとって必要であるということである。本稿は「社会統計学」の継承すべき伝統を「社会批評としての統計学」として捉え、社会統計学の伝統のなかに「社会批評」の契機を探ることにしたい。

2. 歴史のなかで：社会批評としての統計学の歴史的運動

2-1. 蜷川統計学のユニークさ

経済統計研究会の研究上の古典的テキストの地位を占めたのは蜷川虎三の著作『統計利用の基本問題』と『統計学概論』であった。経済統計研究会（現 経済統計学会）は蜷川派ではないが、そこで主流になったのは蜷川学派であったことは間違いなく、他の潮流が自己の立場を定義するときに蜷川学派との距離を用いたことは確かだからである。

クーンは『科学革命の構造』のなかで、そのようなテキストが持つ二つの基本的な性格として「前例のないユニークさ」と「解決すべきあらゆる種類の問題をそれが提示している」ことをあげている。こうした特徴を蜷川の著作（研究）がどれだけ持っているかについては議論の余地があるとしても、少なくとも経済統計研究会の創設メンバーが、そのような性質を蜷川の著作に認めたことは確かである。例えば、蜷川理論が、いわゆる「実質社会科学から方法科学への統計学の転換」を「統計利用者」という立場（ここで蜷川が想定するのは統計利用者一般ではなく、当時の「全体主義的」国家に抗する「無産労働者」などの民衆であり、これにより統計学は「社会を見渡す管制高地に立ち国家機関（統治する者）の立場から社会を秩序ある対象物として観察・監視し、管理する学」という性格から距離を置くと共に、単なるハウツウ的な手続き論を超えた社会批評の次元を理論の問題として獲得したのであるが）を論弁上の空間に確保することで歴史的・社会的な批判的次元を持った方法論として達成しようとしたこと、また「存在たる集団」というキー概念を導入することで社会批評的次元を付与された方法論に「唯物論的な（？）」認識論的基礎を与え、さらに、その延長線上に「解析的集団」・「意識的に構成されたる集団」という概念を導入

することで「(蜷川が言う)英米流数理統計学」の統計データ解析法をドイツ社会統計学派を批判的に継承する統計理論の基盤上に「整合的に」埋め込もうとしたことは、そのような「前例のないユニークさ」の証拠であり、その後の日本の社会統計学派に設定すべき問題とその解決方法を提示するものであったと言えることが可能である。

2-2. 戦後改革における社会統計学の立場

アジア太平洋戦争の後、新しい歴史状況が開かれる。第一に、戦後民主化の流れのなかで、蜷川派に限らず、社会統計学派のなかの「社会批判的潮流」の人々が国家の諸機関や審議会に参加できる条件が生まれ、「統計利用者の立場」から官庁統計及びその制度の改革に関与することが可能となったことである。「利用者のための統計学」は、こうした状況のなかでは「統計の作成と普及のための統計学」になることができたのである。第二に、そのような状況と呼応して、また、状況の変遷に伴う社会的対立の先鋭化のなかで、戦後労働運動の側から統計にたいする要求が高まり、上杉正一郎の仕事や「統計の闘い」に代表されるラジカルな統計批判・統計改革運動が展開したことである。そこでは「内部」からの統計改革運動は「外部」からの統計批判運動と結びつき、統計の作成と公表と利用の問題が統計の社会的制度的機能という新しい問題領域のなかで再設定されたのである。第三に、戦後改革のなかでアメリカ合衆国から無作為標本調査法や統計的品質管理法が時代のモードとして導入され、それを契機に「(英米流の)推測統計学(=推計学)」への関心が急激に高まったことである。こうした高まりは、同じく当時の知的モードの一つであった「マルクス主義」と結びつき、推計学を「唯物弁証法的哲学」で基礎付けるという奇妙な企てを生み出したが、こうした企てに蜷川派は批判的な姿勢をとり、蜷川理論に依拠しつつ批判的議論を展開していった。そして、そのなかから蜷川理論の枠組みを超える新しい言説が生み出されていったのである。例えば、大橋隆憲は統計理論の形式主義化に異議を申し立て、統計理論を歴史(社会史)のコンテクストのなかに送り返し、理論を生成の現場で捉え、その歴史的・社会的意味を理解することの重要性を示した。大橋によれば、統計に関する諸活動は、その高度に抽象化された理論に至るまで社会諸関係の網の目のなかに捕えられ、歴史化されているのである。また、内海庫一郎は「第3インター系のマルクス主義哲学史」に関する豊富な知識に基づいて統計学と唯物弁証法の関係を再考する仕事に取り組んだ。内海は推計学を弁証法と結びつける考え方を「観念論」として斥ける一方、「蜷川には唯物論はあるが、弁証法はない」とする梯明秀の見解に同調し、「唯物弁証法の諸見解(諸法則)」を参照基準にした蜷川理論の再検討をおこなったのである。内海の企ては、「唯物弁証法(の諸法則)」に諸学問の帝王の座を占め、他のすべての諸学を先導し、かつ、その真偽の判定の最終基準を定める最高法規としての地位を与え、蜷川理論を「唯物弁証法」によって最終審において裁くというものであり、ジダーノフ主義・ルイセンコ主義・「スターリン言語理論による旋回」といった時代を特徴づける諸事件に代表される「冷戦型知識人」の知的モードの一つであった。しかし、それでも、内海の企ては、ファイアアーベント流に言えば、理論の状況を流動化させ、新たな問題状況を作り出す原動力となり、そこから多くの意義ある仕事が生み出されていったのである。

2-3. 大屋理論の登場へ

1960年代の中頃に、ひとつの転換点があった。大屋祐雪による蜷川統計学批判である。大屋は内海とは異なった視角から蜷川統計学の批判を行い、新たな統計学研究プログラムを提唱したのである。大屋がとった蜷川批判の戦略は、単純明快である。社会のなかで歴史的に形成され、営まれている「統計実践(統計・統計作成・統計利用、及びそれらに関する観念形態・理論的活動)」を統計学の研究対象として設定することである。大屋によれば、そうすることによってのみ現存する統計実践は「客観的観点から」余すところなく概念化され、その社会的歴史的性質が批判的に解剖されることができるのである。たぶん、学問としての社会統計学の課題は統計的实践についての「批判的」知識を社会に提供し、統計作成者や統計利用者の(さらに大衆の)統計実践についての観念に働きかけ変容し、統計実践を然るべく方向に

変化させることなのである。その意味で、大屋にとって統計学は社会科学なのである。ところで、この大屋の戦略には、統計学を「社会科学方法論」として構築しようとする蜷川派的試みにたいする正面からの反対が含意されていた。すべての事柄を方法論の文脈に回収してしまう蜷川流の統計学観は、大屋のプログラムの実現にとって、認識論的障害物となるのである。

2-4. 大屋理論に賭けられていたもの

大屋が自己の主張を「反-方法論」と結びつけて展開したことは、蜷川の流れをくむ方法論支持者たちからの激しい反発を招いた。統計の作成と利用を指導する方法の開発という統計学の課題の位置づけが、大屋のプログラムでは不明確になるからである。しかし、大屋のプログラムの狙いは、別のところにあったと考えた方がよいかもしれない。当時、蜷川理論は内海による蜷川批判の影響も受け、理論においては「方法論批判」、統計・統計実践の実態解明においては「統計の対象反映性批判」へと向かっており、おそらく大屋が問題としたのは、そのような方向が内包している諸限界だったのである。なぜなら、「方法論批判」というのは、結局のところ、「方法は対象によって規定される 対象とは存在であり、存在は弁証法的に運動している 方法は弁証的でなければならない 当該の理論を支えている方法は弁証法的でないから現実を隠ぺいしている」という単純な論理構造に帰着するのであり、また「対象反映性批判」についても同様に、「対象（存在）は弁証法的方法論に基づいた正しい科学的理論によってのみ歪みなく反映される 当該の統計・統計実践は正しい科学的理論に基づいて指導され構築されたものではない その原因は、一方では、統計方法によって対象を把握（反映=模写）することが持つ方法上の限界にあるが、他方では、対象を「誤った理論」によって把握し、反映・制御しようとするに由来する社会認識上の限界にある この後者の限界は、社会的・歴史的基盤を持っている」という論理に帰着するからである。このような批判は、内海派の統計学史研究に認められるように批判対象の方法論的構造、諸前提、それが立脚する社会的基盤を、限定された視角からではあるが、明示化するという利点を確かに持つが、他方では、批判の諸対象を「正しい」理論ないし方法という固定した立場から裁断し、その批判の対象物は「自己」と異なるから間違っていると一方的に宣言するという意味で「悪しき意味での独断論」の閉域に落ち込みやすいからである。そこには、おそらく生産的な批判（=批評）の概念、批判対象を「他者」として設定し、「他者」のディスクール（=言説）のなかに「探究者」として入り込み、そこに潜む諸断層を探索し、そのディスクールが社会構成体の諸実践のなかに埋め込まれる（=分節化）様式を明らかにすると同時に、その出会いのなかで自らを革新し、新しい知識の地平へと位置移動していくことを可能にする批判の戦略が欠けているのである。大屋による「統計学=社会方法論説」への批判に賭けられていたのは、こうした批判概念の欠落なのである。大屋は、こうした批判概念の欠落を「認識主観の視座」の社会学に解消し、統計学を「統計実践の社会学」へと変換することで解決できると考えたのである。

2-5. 大屋理論以降

大屋の理論的問題提起は、方法論的批判へと傾斜しつつあった社会統計学の研究プログラムを「統計そのもの」の批判的実態的研究へと向け直すという効果を持った。1960年代の後半から70年代にかけての反システムの社会運動の高揚とも関連し、新しい研究プロジェクトが始動したのである。例えば、日本経済の実証的研究と結びついた「統計指標体系/統計資料体系」の研究の推進や、代案的な政策提言と結びついた計量モデルに基づいた政策効果シミュレーションへの積極的な取り組み等である。このうち前者は、「統計の対象反映性」という概念をキ・コンセプトとしつつも、大橋隆憲の「現代資本主義把握のための統計指標体系」研究や上杉正一郎の「統計の歴史性・社会性」の研究を継承しながら、日本経済の実態把握に入り込み、実態把握のための統計指標体系の構築に取り組んだものであり、統計の批判に留まることなく、社会の現実を「批判的に」解剖するために、統計の積極的な活用を試みるものであった。他方、後者の計量モデルに関わる研究は、数量的方法を社会科学的研究へ無原則に適用することに反対してきた経済統計研究会の伝統的な姿勢を逆転させ、社会に対する「批判的」参加への武器として積極的に活用し

ていこうという姿勢に転じるものであった。この後者の研究プロジェクトは、数量的方法の批判を蜷川理論を超えて積極的に押し進めていた内海らとの激しい対立を誘引することになり、論争は科学研究の方法をめぐる論題に留まらず、科学的実践とは何か、社会科学における科学性とは何か、といった科学的実践をめぐる根本的な問題へと発展した。そして、このような論争のなかから英語圏で大きな勢力を持つ「分析的マルクス主義学派」のなかの一部の潮流の科学性観と合流するかにみえる見解（立場）が登場していることは注目に値しよう。どのような科学であれ科学である限り、その方法（科学的方法）に差異はないという見解をもち、マルクス主義の独自性を「方法（形式）」のレベルでの差異にではなく、「コンテンツ（内容）」の違い（社会に対する「批判的＝批評的」眼差し）に求めるかにみえる見解が現れたのである。

2-6. 社会批評の運動としての社会統計学

戦後社会統計学の歴史を振り返るとき、そこに見いだすことができるのは、統計学の社会批評性である。社会統計学は、統計の批判・統計に関する観念の批判・統計方法の批判に基づいた統計・統計方法の活用を第一義的な課題として設定するが、そこには三つの意味で統計学の社会批評的性質が含まれている。第一に、統計の批判は、統計（その作成と利用）を社会の生産物として把握する限り、統計を生み出す社会機構の批判（＝批評）を含んでいる。第二に、統計に関する観念（例えば、統計数値の「神秘的性質」といわれる事柄）の批判は、そうした観念を生み出し、また逆に、そうした観念によって形作られもする社会機構の解剖と不可分であり、社会機構に対する批評的見解を含んでいる。第三に、統計方法に対する批判は、方法を単なる「技術」と見なすのではなく、ある社会のなかで、ある特種な実践と結びついて歴史的に出現し、統計学という制度化された学問のなかで形式化されたものであると捉える限り、方法に対する批判（＝批評）は社会にたいする批評的観点を含んでいるはずである。戦後日本の社会統計学の歴史のなかに、こうした社会批評的性格を読み取ることが可能なのである。

3. 社会統計学の学問規定と「社会批評としての統計学」

経済統計学会は、その会則に学会の目的として「1. 社会科学に基礎をおいた統計理論の研究、2. 統計の批判的研究、3. すべての国々の統計学会との交流、4. 共同研究体制の確立」の四つを掲げている。このうち社会統計学の学問規定に関わるのは1. と2. である。そこで、ここではこの二つの学問規定についてそれぞれ検討し、社会統計学における「社会批評的性格」について考えてみよう。

3-1. 「社会科学に基礎をおいた統計理論」という学問規定について

「社会科学に基礎をおいた統計理論」とは、何を意味しているのだろうか。第一に、この表現には「社会科学のための統計学」という意味があると思われる。こうした読み方には、若干無理があるが、例えば内海庫一郎が1969年に編集した標準的教科書のタイトルは『社会科学のための統計学』（評論社刊）である。ここで、蜷川虎三の著作にまで遡り、自然科学的観察結果と社会的大量観察（＝社会調査）結果を区別し、後者をさらに行政・業務記録結果との関連において定義づけ、それに本来の「統計」という名称を与えるという蜷川統計学の理論的戦略に与する必要はないとしても、この「社会科学のための…」という表現には、「社会」科学的領域には「自然」科学的領域とは異なった独自の存在＝論理的構造があり、従って、それを捉える認識論的構造は独自であるはずであり、それに独自の方法的原理と内容があるとする見解（＝立場）が含意されている。同じ「社会科学のための…」というタイトルを持った統計学教程書の大多数が、「数量的データ処理一般のための領域中立的な一般的方法としての統計学」を社会科学的領域へ「適用（応用）」すること（＝その適用に伴う諸問題を考えること）を企図しているのに対して、ここで賭けられているのは、社会科学に独自の統計方法を開発し、その独自の方法を社会科学研究に適用すること（及び、その適用の諸条件を考えること）である。こうした見解に立つと思われる内海が方法論を重

視し、哲学的（存在論的・認識論的）な研究へと傾斜した統計理論を展開したことは、当然であった。そこには、「社会科学としての統計学」というタイトルをめぐる闘争があったのである。

第二に、「社会科学に基礎をおいた統計理論」という表現には、「社会科学としての統計学」という意味がある。先述の「社会科学のための…」の意味は、「社会科学の研究に役立つ統計学」ということであり、仮に、社会科学に独自の方法に関与しているとしても、統計学（＝統計方法）自身が、どのような研究領域に属する学科なのかは、さしあたり問題ではない。しかし、「社会科学としての…」という規定では、統計学自身が属する学問領域が問題となっており、社会科学に属することが明示されている。歴史的には、統計学は社会の「科学」として成立し、その後、一方で、その「適用領域」を拡大するに従い、「社会の科学」の分野から自立化した「数量的データ集団一般を対象とする応用数学」の一分野としての性格を強く持つようになるが、それに対抗して他方で、社会の科学の一分科として社会体の数量的研究を行う数量的社会学として統計学を再構築しようとする動きがドイツで推進され、「社会統計学」が確立した。統計学・社会統計学は、歴史的に見れば社会科学に属する学問だったのである。しかし、その後、ドイツ社会統計学の研究プロジェクトは崩壊し、社会の数量的実態研究を行うという「実質社会科学的」課題は他の個別的諸学科（例えば、経済学や様々な社会学）に譲渡され、社会統計学は「大量観察法を軸にした社会の数量的研究方法」という方法論の地位に自らを限定するようになったのである。自らがどの学問領域に属する学問であるかに関して、社会統計学は不安定な地位に置かれることになったのである。戦後日本の統計学論争の争点のひとつが、統計学の学問的規定論争であったのは偶然ではないのである。「社会科学としての統計学」という表現は、おそらくは大屋祐雪の理論の影響も受けて、このような論争への「新しい問題意識」をもった介入であったと考えられるのである。なぜなら、この表現には、旧来の「実質科学説」とは全く異なった立場から、統計学を社会科学として捉え、実践していくという意志が表明されていたからである。統計学が社会科学であるとしたら、統計学に固有な社会科学の対象（ある社会のなかで歴史的に形成された対象領域）があるはずであり、そのような固有な対象は「哲学的」方法論が想定するような方法ではもちろんありえないだろう。では、社会科学としての統計学に固有な対象は何か。この問題は、先の社会統計学の学問規定の第二の規定の問題へと帰着する。

3-2. 「統計の批判的研究」という学問規定について

「統計の批判的研究」という規定は、社会統計学の研究対象と研究方法（＝研究スタイル）の独自性に言及している。社会統計学の研究対象は「統計」であり、その研究方法（＝態度）は「批判的」である。研究対象が「統計」であり、それを「批判的に」研究するということは、「統計的」という観念形態に構成的に結びついた諸対象を、ある社会において歴史的に形成された諸対象として第一義的な研究対象に設定することである。

「統計」という言葉で、われわれは、例えば、「統計を見る」という表現から「個々の統計データ」をイメージするかもしれないし、「統計をとる」という表現から「統計的」という観念形態に包摂される何らかのデータを作成するプロセスをイメージするかもしれない。あるいは、「統計的に見る」という言葉から、ある与えられた事象やデータに対して「統計的な」分析を行うことをイメージするかもしれない。おそらく、会則の規定は「個々の統計データの研究」に言及しているが、あるデータを「統計的」と形容できるデータにする条件、より一般的に言えば、ある事柄を「統計的」と形容される事柄にする条件を同時に考えることなしに「統計」（「統計的」という形容詞に包摂される対象物）を研究するということは、ある社会のなかで歴史的に形成され、受容されている「統計的」という経験的観念を前提し、共有することであり、統計を統計（＝統計的なもの）とする社会的諸力を不問にしたうえで、「統計的」と形容される事柄の分類学的・経験的記述を行うことである。ここでは、「統計的」という社会的効果（社会において産出される様々な統計装置、およびそれに有機的に結びついている諸観念の体系）を産出し、制度的構築物として歴史化していく社会的・歴史的諸力の存在が問われないのである。このような諸力を思考

することが、「批判的＝批評的」という言葉の機能であり、そのような諸力の研究へと社会科学としての統計学は進まなければならないのである。ある社会のなかで「統計的」という観念及びそれに結びついた社会的実践が社会の認識運動として形成され、社会の諸実践・諸事象を包摂していき、社会の一面を形作り、社会の再生産にとって不可欠な社会的機能として歴史化していく過程の研究が統計学の第一の研究対象となるのである。その意味で、統計学は社会科学（＝社会科学としての統計学）なのである。

4. 「社会批評としての統計学」と統計方法論

社会科学としての統計学は、社会的実践としての統計活動の構造と機能を社会的諸力の機構全体のなかに位置づけ解明することによって統計活動を効果として産出する社会的諸力を批評することができるが、同時に、社会の実態研究に必要となる資料について「統計資料論」という形態で知識を提供することができる。しかし、統計の作成と利用の実践に対して、社会科学としての統計学は、どのような関係を取り結ぶのかという問題が残っている。社会科学としての統計学は、こうした課題に応えることができるのだろうか。

ここで問題なのは、こうした課題が統計学に方法論としての役割を強く要求するように見えることである。実際、統計学を社会科学方法論として確立しようとした蜷川虎三の主著のタイトルが『統計利用の諸問題』であったのは偶然でないように思われる。しかし、諸科学の実践が科学哲学が提示するような意味の科学方法論に従う「合理的」活動ではないらしいことは、近年の科学史的・科学社会学的な研究が明らかにしているとおりである。確立した諸科学の実践は、ある局面においては科学教育訓練機関のなかで提示される教科書風マニュアル（それは文書化されているとは限らない）の指示に従って行われるということは本当だとしても、そのようなマニュアル（それを方法論と呼んでも良いが）は、日々の科学的実践の経験から得られた経験的知識を、その科学分野で古典的と評価される諸研究を土台にして集成した科学研究の手本（見本）集のようなものであり、定型的な研究を形どおりに進めるには役立つとしても、科学研究を「飛躍」させるブレークスルーな研究は、そのようなマニュアルにしたがった活動からは必ずしも生まれまいだろう。マニュアルや方法論は、研究活動に秩序を与え、不規則的活動や異端を排除する装置としては有効かもしれないが、科学活動を一定の鑄型に押し込め、科学の生産性に不可欠な多方向に分散していく力動的な思考を抑圧してしまう可能性があるからである。方法論というのは、定式化され、教科書化されてしまえば、さらにマニュアル化されてしまえば、科学活動を定式化（形式化）し、固定化してしまう「負の」働きを持つのである。例えば、ドイツ社会統計学は数量的社会研究を行う「実質社会科学」として自らを形成し、その崩壊の過程で数量的社会研究の方法論（数量的社会研究の論理と研究の諸手段・諸道具を提供する「方法科学」）として再編成・再構築されたが、その方法論の内容は、進行中の数量的社会研究のなかで作動している統計の生産と利用の諸実践を抽出し、記述・分析し、統計方法論という形式で理論化したものである。統計方法論としての（ドイツ）社会統計学は、「実質科学」としてのドイツ社会統計学の諸研究のなかで作動していた数量的研究のための諸装置を対象として形成された統計実践の理論であり、その意味で、当時の数量的社会研究の実態を反映し、固定化したものである。

方法論が、そのような性質を持つとしたら、統計の作成と利用の諸実践を指導する理論としての統計方法論には、どのような発展可能性が残っているのだろうか。第一に、方法論の理論的働きについて再定義することが必要だろう。認識実践を先導する理論という方法論の定義を放棄し、諸々の数量的社会研究が確保してきた認識実践上の「成果」を確認し、確保するという「現状確認的」機能にその地位を限定することである。第二に、方法論は固定的地点に自己を構えるのではなく、その時々々の数量的社会把握の認識実践に介入し、常に自己を更新していくことが必要だろう。方法論は「歴史的方法論（歴史的认识論）」にならなければならないのである。第三に、方法論は、社会研究という領域に自己を限定するのではな

く、データ処理に関与するすべての領域にまで視野を拡げ、数量的社会研究の推進という視点から様々な領域でのデータ処理実践を比較検討し、その検討結果を社会研究の分野に情報提供していく必要がある。方法論は、比較方法論とならなければならないのである。

統計方法論が可能であるとしたら、以上の必要に応えることができなければならないだろう。しかし、そのような方法論を開発する研究とは、どのようなものなのか。第一に、ある社会体の中で歴史的に成立している数量的社会研究（＝数量的社会認識実践）のなかで作動しているデータ解析装置を歴史的な分析対象として設定し、その装置の構造と数量的認識過程における働きを分析し、さらにその装置の歴史的な形成のメカニズムを解明する研究が必要だろう。第二に、そのようなデータ解析装置がそのなかで作動している社会研究の社会的機能を分析し、それとの関連で、データ解析装置自体の社会的働きの分析が必要になるだろう。第三に、社会科学的、自然科学的、人文科学的、工学的など、様々な領域の認識実践が相互に干渉・影響しあう様式を分析する必要があるだろう。第四に、統計方法論は、常に「先端的な」社会研究の場で作動している方法装置を研究しなければならないが、その最も有効な仕方は、その時々々の社会研究の場に当事者として介入・参加することである。統計学は社会を研究するという「実質的な」内容を放棄することにより、方法論として自己を確立したが、統計方法論として有効な知識を提供するためには「実質的な」社会研究に自ら取り組まなければならないのである。

5. 結論として：社会統計学における社会批評の観点

以上の考察から、次のことが確認できる。社会統計学は、1) 社会的実践としての統計実践・統計に関する諸観念を社会科学の対象として設定し、分析することを課題とすること、2) 社会を数量的に研究し、そのなかで数量的データの利用・処理方法の開発に取り組み、その成果を「方法論」という形態で叙述すること（あるいはデータ解析の模範例を提示すること）、を課題とすること、において社会科学であること、そして、このような「社会科学としての統計学」は「社会批評」という性格を持っていること、である。ここでは、社会統計学の社会批評的性格について、もう少し述べることで結論に代えることにしたい。

社会的実践としての統計実践とそれに構成的に関与する諸観念を社会科学の対象として研究することは「社会批判（統計批判）」の契機を含んでいる。ここで「社会批判（統計批判）」とは、対象としての社会（統計実践）にたいして「客観的な距離」をとる認識論的様式のことであり、それは「社会批評」の契機を含んでいる。対象に対して、対象（社会・統計実践）に関与する「認識論的主体」が「批評家」として振舞うことが、対象に関与しつつ、対象に対して「客観的距離」をとることを保証するのである。「批評家」として振舞うことによって、統計学者は統計実践がその実践の当事者達のあいだに「自然発生的」に生み出す諸観念の場を超え出る契機を手に入れることができる。そこに「社会批判（統計批判）」の契機が生まれるのである。

他方、統計学は社会の数量的研究に取り組むが、この場合にも、社会統計学の「（社会）批評的性格」が問題となる。統計学は、「実質科学」であることを放棄し、「方法論」となったが、にもかかわらず統計学は、新たな「統計方法論」を開発するためにも、また「データ解析の指針を与える」という学問的責務（そこには、進行中の統計解析の在り方に対する社会的・政治的観点からの批判も含まれるはずである）を引き受けるためにも、データ解析の実践（＝実質的社会研究）に当事者として関わらなければならない。しかし、「方法論」としての統計学は、このような実質的社会研究のなかでどのように振舞えばよいのだろうか。「批評」という概念の導入は、こうした問題を考えるためにも有効である。統計学は「実質的社会研究」に関与しつつも、その「実質的社会問題」には第一義的な関心を示さない。第一義的な関

心事は、その研究内部での数量的データの処理方法にあるからである。こうしたことを統計学に可能にする条件は、研究に積極的に関与しつつも、研究過程に対して「客観的距離」を取ることにあると思われる。この「客観的距離」を取る行為を「批評行為」と呼ぶならば、ここでも統計学の振る舞いは「批評的性格」を持っているのである。

社会統計学は、以上のように「(社会)批評的性格」を持っている。しかし、「批評」について語るとき、決定的に重要なことは「批評の観点」の問題である。対象に対して「客観的距離」を取ると言うとき、問題なのは「距離」の取り方である。人は必ずある場所(立場)に陣取り、一定の姿勢で、ある対象に立ち向かう。「距離」を取るとは、別の場所に陣取り、別の姿勢を取ることである。「客観的」とは、陣取る場所、姿勢の取り方に言及している。しかし、人は、どのような条件の下で「距離」を、しかも「客観的距離」を取ることができるのだろうか。「批評の観点」とは、この条件に言及している。「批評」とは、定義からいって、必ず、あるポジションから行われなければならないからである。このポジションを「客観的」と形容するのは、科学的(科学哲学的)言説の常套句であるが(宗教的言説なら自身のポジションを「神」や「真理」という言葉で、法哲学的言説なら「正義」という言葉で形容するだろう)、科学史(科学社会史)の叙述が示しているのは、様々の社会的勢力による「客観的」という言葉の取り合いである。「客観的」という形容詞はポジションについて何も語っていないのである。明らかにしなければならないのは、「語る主体のポジション(=批評の観点)」なのである。

「批評の観点」とは、ある社会において社会的諸闘争の力動的場のなかで歴史的に形成される言説のポジション(複数)である。蜷川虎三は、自身の統計学を「統計利用者の立場」にたつ統計学として位置づけたが、この立場が蜷川における「批評の観点(ポジション)」であり、蜷川統計学と呼ばれる理論の成立可能性の条件であった。蜷川にとって、「統計利用者という立場」は抽象的な観念ではなく、歴史的に意味付けられた「社会学的」概念だったことを想起すべきなのである。従って、社会統計学にとって必要なことは、蜷川以降の今日の問題状況の中で「批評の観点」をどこに構えるかを考えることである。

「批評の観点」は、固定したものではなく、諸状況のなかで歴史的に流動していくものであり、しかも一つではなく、多種多様なものである。経済統計学会は経済統計研究会として出発したとき、この「批評の観点」を一定の方向性を持った社会批判の運動に結びつけ、統計(統計実践)批判の運動(「統計の闘い」として統計学を展開し、統計学(=統計批判)を社会批判に結びつけようとした。「社会批評としての統計学」の成立である。しかし、今日、諸状況は変化し、かつての社会批判の運動は有効性を失いつつあり、抜本的な形態変容のなかにある。統計批判の衰退は社会批判の運動の衰退に結びついている。こうしたなかで批評の観点を再構築するために必要なことは、社会批判の運動の形態変容を直視し、その形態変容に結びついた社会変容を批評する観点(=社会批評の観点)を確立することである。例えば、今日の社会変容が「地球環境の危機」、「マイノリティーの権利」、「グローバル化」、「情報(情報ネットワーク)テクノロジーによる世界の再編」等という大きな物語と結びついているとすれば、社会統計学は、これらの物語を批評し(かつ、創作し)、進行する社会変容のなかで「何をなすべきか」を考えなければならないだろう。統計(統計学)にたいする「社会」の要求が「情報グローバル社会化」の技術的要求を名目にした社会や身体の再編への要求と連携しつつ、社会(マクロ)管理や身体(ミクロ)管理などの各種の管理(監視)に対する要求と結びついて強まっている今日(例えば、「マイノリティーの権利」の物語は、今日的な情報テクノロジーによるマイノリティーに関する統計の整備と統計解析に対する要求を含んでいるが、同時にマイノリティーに対する社会的・身体的管理への要求を含んでいるだろう)、学問としての社会統計学に要求されているのは、これらの要求にのみ込まれることなく、これらの物語と情報技術が与える恩恵を享受しつつ、進行する社会的・身体的過程にたいして批判的に構える「批評の観点」を確立することなのである。